

スリランカに魅せられて

南日本新聞社報道部 記者 緒方 隆

これまで海外は何力国も訪れたが、先進国ばかり。事前研修で言葉を習っても、自分が知る言語圏とは全く違い、頭に入らない。リズム感で何とか覚えたシンハラ語は「アーユーボーワン(こんにちは)」と「マゲナマ(私の名前は)」だけ。不安だらけのスリランカ行きだった。

同国では、内戦が2009年まで23年間も続いた。主権を握るシンハラ人に反発し、タミル人が独立を目指したことが要因だ。街の中にはぎすぎすした雰囲気もあるのだろうと思ったが、出会う人は人種にかかわらず、穏やかな笑顔で迎えてくれる。そんな優しさに触れ、不安は消えた。

海外は初めてという生徒が多かったが、若さゆえの適応力の高さには驚かされた。同国最大の都市、コロンボに到着したのは深夜。朝を迎え、車や三輪タクシーで騒然とする街の雰囲気に気おされたのは最初だけだった。ホームステイ先でトイレットペーパーのないトイレに出くわしても、シャワーが屋外で水しか出なくても、すぐになじんでいった。

ホストファミリーの尽力もある。私たちの話を粘り強く聞き、ゆっくり語りかけてくれた。お互いを知りたいという心一つで、“言葉の壁”は簡単に乗り越えられることに生徒も気づいただろう。

青年海外協力隊員との交流では、日本との違いを学んだ。動物園職員には日本のレベルとはほど遠い衛生管理について、保健師からは食生活に由来する地域特有の病気などについて説明を受けた。危険と隣り合わせの仕事もあると聞きながら、「いつか私も途上国の役に立ちたい」という声が上がったことは、今回の国際協力体験事業が意義あるものだったことを裏付ける。中にはスポーツで貢献できると聞き、勇気づけられた生徒もいた。

地元ガイド、ニハールさんが印象に残る言葉を教えてくれた。「憎しみは憎しみで消えず、愛することで消える」。1951年、サンフランシスコ講和会議に出席したセイロン(今のスリランカ)の大臣が平和を願

い、演説で述べた一節だという。仏教の教えが基になっており、日本に賠償を求めず、戦後復興を後押ししたとされる。両国に深いつながりがあることを知った。

一方で、コロンボの街を見渡すと、アジアの大国の“足音”を感じられた。仏教の象徴であるハスを模した放送通信・観光タワーや高層ビルの建設など、中国企業の進出が近年相次ぐ。インドやパキстанを擁する南アジアの平和が、微妙なバランスの上に成り立っていることを改めて考えさせられた。

滞在1週間で「ストゥティ(ありがとう)」「ラサイ(おいしい)」「サライ(辛い)」と、いくつかのシンハラ語がすんなり言えるようになった。自宅で「H I N A H E V I -」の歌を口ずさむこともある。もちろん「D O I B A B A」のフレーズは特に力を込めて。すっかりスリランカに魅了された。

将来はシニア青年海外協力隊員に、などと思ってしまふほど貴重な経験をさせていただき、関係者の方たちに感謝したい。



ホストファミリーと一緒に 本人：中央



取材中の様子

スリランカでの日々を思い出しながら

南日本放送 記者 下山 倫

「海外出張案件があるけど、どうけ？」上司の一言ですべては始まった。出張取材はよくあるものの、報道記者10年目の私にとって海外出張は初めての経験。「いいっすねー！行きたいです！」勢いで返事をした私に告げられた国名は「スリランカ」だった。ウィッキーさんしか思い浮かばなかった(中高生はわからないかも)

出発前の研修等で、現地では毎日カレーを食べること、食事は手で行うことなど知った時は「中々ない経験だし、楽しみだな」とそこまで驚かなかったが、トイレの画像を見た時は今回の出張を快諾したことを少しだけ後悔した…。案の定我々のホームステイ先もそのタイプだった。和式の汲み取り便所の脇にシャワーヘッドとバケツが置いてある、ペーパーはない。鹿児島から持参した9か月になる次男のおしり拭き、大活躍。

中心都市コロンボは都市化が進んでいた。中国企業などにより高層ビルが次々と建設中で「開発途上国」という言葉と現実とのギャップを感じた。一方、ホームステイ先で目にしたのは、育つ植物や土の色、景色は違うものの鹿児島にもあるような農村だった。しかし、風景は似ていても経済状況は違う。集落の平均月収は日本円でおよそ2万円。集落の商店で購入した500mlの炭酸飲料は90スリランカルピー⇒日本円で62円。350mlの缶ビール(買ってません!)250ルピー⇒日本円で170円。仮に日本での平均月収を20万円とした時に、ジュースが620円、ビールが1700円で売っていると考えると、集落の経済状況をイメージしやすいかもしれない。なかなか買えたもんじゃない。

今回の私の役目は、現地で手探りで交流する中高生を取材すること。みんなの表情や声、異文化を目の当たりにした時のリアクションを記録し続けた。積極的に交流し何かを学び取ろうとする姿勢に引き込まれ、一瞬一瞬を記録することに夢中になりすぎてしまい映像素材は7時間以上になった。

6500キロ離れた異国の地でレンズ越しに感じたことは、文化は違えど人々の笑顔は同じだということだった。お互い言葉がほとんど通じない分、私たちはいつも笑顔だった気がする。コミュニケーションに言

葉は重要なツールだが、それ以上に表情や伝えようとする気持ちが一番大切だということに改めて気づかされた。みんなの現地での奮闘ぶりやその空気感を、ご家族をはじめ視聴者にどれだけ伝えられたかは分からないが、私にとって今回の同行取材は、人とかがわる仕事の基本の記者として、また個人としても新たな価値観や考え方に気づかされたものだった。

価値観の話でもう1つ。道中、現地通訳の『モモタロウのお父さん』がスリランカ人の信仰心や慈悲深さを力説してくれたが、その傍らの運転手をはじめ、町中のドライバーの運転にはほとんど思いやりが感じられなかった…。ブッダに習い、もう少し愛をこめてハンドルを握れないものかと思ったのは私だけではないはずだ。

平成最後の夏にスリランカで見た交通渋滞と現地の人々の笑顔、15人の好奇心を忘れることはないと思う。最後になりましたが、27年にわたり事業を続けられている弓場会長はじめ関係者の皆様に厚く御礼申し上げます。貴重な体験をさせていただきありがとうございました。そして15人のみんな、スリランカの皆さん、素敵な時間を本当にありがとう！



取材中の様子



ホストファミリーと一緒に 本人：中央

新聞記事

南日本新聞

【平成30年7月26日（木）】

鹿県中高生15人 スリランカ派遣 国際協力体験へ

「鹿児島県青少年国際協力体験事業」に参加する中高生15人が25日、派遣先のスリランカに向けて福岡空港を出発した。8月1日に帰国予定。

事業は27回目で、スリランカへの派遣は初めて。同国最大の都市、コロンボ近郊のウラポラ地区に滞在する。青年海外協力隊の活動を学び、ホームステイや地元の子どもたちとの



を深める。
鹿児島市のJR鹿児島中央駅で結団式があり、写真、生徒たちは見送りの保護者の前で同国の公用語、シンハラ語で自己紹介した。同行する実行委員会の弓場秋信会長は「多様な文化に触れることも

に、仲間との生活も楽しんでほしい」と激励した。

リーダーの鹿児島純心女子高校3年、池亀美羽さんは「いい経験になると思う。たくさんのかことを学びたい」と意気込みを語った。
(緒方隆)

南日本新聞

【平成30年8月8日（水）】



スリランカからの帰国報告をする鹿児島県青少年国際協力体験事業に参加した中高生ら

＝7日、鹿児島市の南日本新聞社

スリランカ派遣 中高生帰国報告

鹿児島県青少年国際協力体験事業でスリランカに派遣された県内の中高生15人が7日、鹿児島市の南日本新聞社を訪れ、帰国報告した。「現地の温かい心遣いで言葉の壁を乗り越えられた」など感想を語った。

生徒は、7月25日、8月1日の日程でスリランカを訪問。同国最大の都市、コロンボ近

郊のウラポラ地区でホームステイしながら、青年海外協力隊の活動を学び、現地の小学生らと交流した。

川辺高校2年の栄村茉莉香さんは「言葉が通じず孤独を感じることもあったが、ホストファミリーの優しさに助けられた。輝北中学校3年の丸山健生さんは「世界に目を向けるきっかけになった。将来は国際関係の仕事に就きたい」と話した。
(緒方隆)



①

言葉の壁超え心通わす

文化に触れる

鹿児島県青少年国際協力体験事業で、県内の中高生15人が7月25日～8月1日、スリランカを訪れた。言葉や慣習の違いを超え、国際社会で活躍したい、という夢を抱くようになった生徒たち。訪問団に同行し、成長を追った。(緒方隆)

そう漏らしたのは、最年少12歳の松山和子さん(第一鹿屋中1年)。鹿児島から福岡、香港を経由して約15時間。初めて見た南アジアの光景だった。

ホームステイ先は、コロンボから車で約1時間半のウラボラ地区ミーガルラ村。約85世帯300人超が住み、主にヤシや米、果物など農業で生計を立てる。コンクリートの平屋が多く、水道も電気も整備されていた。日

汗や排ガスの匂いが交じり、むせ返るような空気が漂う。スリランカ最大の都市コロンボは、人と車の喧噪に包まれ、路地では野良犬が何匹もうろついていた。「大丈夫かな」。



島国のスリランカは九州より大きく、面積約6万5600平方キロ。人口約2100万人のうち、シンハラ人が7割超を占める。公用語の一つがシンハラ



訪問団との別れを惜しむミーガルラ村のホストファミリーら＝スリランカ・ウラボラ

語で、生徒たちは事前研修であいさつなどを学んだ。しかし「実践で会話が続かない。ホームステイ初日、永谷玲葉奈さん(同)の頬を涙が伝った。

「ゆっくりでいいのよ」。受け入れ先の母シャシニカ・ピウマリさん(34)が優しく寄り添った。永谷さんが持参した指さし会話帳や片言の英語を使い、徐々に距離を縮めていく。いつしか、幼子3人も遊びをせがむようになった。アンマ(お母さん)のおかげ。気が楽になった」と、永谷さ

んに笑顔が戻った。スリランカは香辛料の産地で、既に15世紀には交易品としてヨーロッパに運び出された。食事はスパイスの効いたカレー料理がずらり。「毎食だときついけど」。少し弱気な板元麗さん(龍桜高2年)に、ホストファミリーは口を合意そうに果物を用意してくれ「心遣いがうれしかった。ランブータンはイチミたい。スリランカのオリーブは不思議な味だった」。

丸山健生さん(輝北中3年)は、手を使う食べ方に苦戦した。カレーも米もさらさらでつかめない。「最初は私が食べさせてあげたのよ」と、受け入れ先の母ウィジター・マンガリカさん(48)の思わぬ「暴露」に「優しさが身に染みました」と頭をかいた。

4泊5日のホームステイ。生徒たちは体当たりで、現地の言葉や慣習になじんだ。村のまとめ役、ニマル・マラーシンハさん(60)は別れ際、名残惜しそうに言葉をかけた。「みんなは家族も同然。友好の懸け橋となって再びミーガルラを訪れてほしい」。

メモ

スリランカの正式名は、スリランカ民主社会主義共和国。時差は日本より3時間半。首都はコロンボに隣接するスリ・ジャヤワルダナプラ・コッテ。人口の約75%を占めるシンハラ人の大部分が仏教徒だ。タミル人約15%、ムスリム人(約9%)が次ぎ、ヒンズー、イスラム、キリスト教が信仰されている。シンハラ語、タミル語が公用語で、英語は人間関係を結ぶ「連結語」とされる。通貨はスリランカルピーで1ルピーは約0.7円。



伝統の味や遊びに反響

日本を伝える

に大人の女性から「ラ
サイ(おいしい)」の
声が相次ぐ。福田さん
は「日本の味を理解し
てもらえて良かった」
と顔をほころばせた。

「グリーンティ、
グリーンティ」。人
だかりの中で元気のい
い声が響いた。両親が
志布志市で茶業を営む
福田正宗さん(鹿屋農
高3年)だ。紅茶栽培
が盛んなスリランカ
で、日本の茶文化を知
ってもらおうと、自家
製緑茶を持ち込んだ。

この日はホームステ
イ中に開かれた地元小
学校との交流会。児童
約150人と家族ら
が、訪問団が用意した
日本ならではの出し物
と今別府幸芽さん(鹿
児島高2年)だ。色鮮
れた緑茶も好評で、特
やかな浴衣をまとい、

優雅な女舞と力強い
男舞の、趣の異なる二
つの踊りに、大人も子
どもも興味津々の様
子。今村さんは「外国
人に見せるのは初め
て。『きれい』『いいね』
って声をかけてくれて
ほっとした」。今別府
さんも「踊りが好きな
民族なのだろう。予想
以上にいい反応だっ
た」と汗を拭いた。

スリランカの学校制
度は5・6・2制で、
5・16歳が義務教育期
間。落第制度があり、
全国試験の結果で進学
先の学校が振り分けら
れるらしい。休日は各
地域で講師を招いて補
習授業をするほど、教
育に力を入れる。

勉強や家の手伝いな
どに忙しい子どもた
ち。人気を集めたのは
折り紙だった。幼児教
育に関心がある鯨島舞
離島からただ一人参
加した徳永隼也さん
(赤徳中1年)は、奄
美伝統の三味線で島唄
2曲を奏でた。うたげ
の始まりを告げる「朝
花節」と、徳之島の闘
牛大会で歌われるアッ
ブテンボな「ワイド
節」。スリランカでは
打楽器が多く、弦の音
色は珍しい。静まり返
る会場で「奄美のよう
な小さな島にも長く続
く音楽があることを紹
介したい」と、抑揚の
まいた。



地元小学校との交流会で日本の歌を披露する訪問団
＝スリランカ・ヤタワカ

メモ

スリランカでは、イギ
リスの植民地だった18世
紀に紅茶の栽培が始まっ
た。当時、イギリスは中
国から紅茶を輸入してい
たが、自国の植民地で栽
培した方が経済的だとい
う理由からスリランカに
広めたとされる。産地は
大きく6つに分かれ、高
度によって味や色が変わ
る。畑は山の斜面に切り
開かれ、手先が器用な女
性たちが手摘みする。写
真。農林水産省によると、
年間生産量はインドに次
ぐ30万ト超。貴重な外貨
獲得手段となっている。



交流会があったヤタ
ワカ小学校は、山あい
にあり、外国人と触れ
合う機会が少ないとい
う。「これを機に子ど
もたちに少しずつ日本
の言葉や文化を学ば
せたい」とジャセンタ
ー・シリセーナ校長
(54)。中高生15人が手
探りの国際交流で、小
さな学校に親善の種を
まいた。



衛生管理や習慣に課題

途上国を学ぶ

ん(30)東京都出身の山尾紗代さん(右)は、途上国での暮らしが想像以上に過酷だと教えてくれた。

発展途上国から中進国入りを目指すスリランカで、その一翼を担おうと、日本人74人が青年・シニア海外協力隊員として活動する(7月末現在)。「自分

たちに何ができるのか」。国際協力を夢見る訪問団の中高生15人は、それぞれ思いを胸に現役隊員を訪ねた。「着任早々、デング熱にかかったのよ」。2017年1月に派遣され、コロンボから南へ約15キロのデヒワラ動物園で働く山尾紗代さん(静岡)での勤務経



伝統衣装のサリーを着て動物園を案内する山尾紗代さん(右)＝スリランカ・デヒワラマウントラピニア

ず長靴も履かない」とし、衛生管理に苦労を感じた。スリランカへの協力隊派遣は1981年に始まり、延べ1138人が渡った。鹿児島県出身者も23人いる。医療、教育、農業など幅広い分野で地域社会の発展に寄与する一方、なかなか変わらないものもある。習慣だ。コロンボの東、ケゴール県のデヒオウイタ保健所で働く保健師、長部千寿さん(38)＝新潟県出身は「スリランカ料理は油や砂糖をたくさん使う。運動にも消極的だから生活習慣病が多い」。がんが死因トップの日本に対し、スリランカでは動脈硬化など循環器疾患が4割を占める。糖尿

病患者も多い。長部さんは着任して半年、体操教室など予防事業に力を注ぐ。食事との因果関係を示すデータを見せ、粘り強く参加を呼び掛ける。管理栄養士になりたいという小宮那々花さん(川辺高2年)は「子ども時代が大事。給食メニューを考えたい。自分の目標が明確になったと聴き入った。今が元気だからではなく、将来の大切さを訴えたい」。池亀美羽さん(鹿児島純心女

子高3年)は話す。作業療法士を目指しており、専門知識を持つ人を途上国で一人でも増やしたいという。バドミントン経験を生かし、ナショナルチームの練習をサポートする隊員もいる。「自分が好きだった得意だったたりする分野でも、途上国の役に立てると知った」と栄村茉莉香さん(川辺高2年)。ほんの少し勇気を出せば、世界を変えられることに気づいた15人の夏だった。

メモ

日本とスリランカは1952年に国交を樹立した。日本は経済支援を約60年間続けている。支援額はトップ。外務省によると、毎年の支出総額は約3億4億。スリランカでは、1日1・25円。未滿で生活する人の割合は90年が15%だったが、その後20年間で4%まで改善された。国民総所得は3800万。2009年の内戦終結を機に外国人観光客が急増し、16年に初めて200万人を突破した。八つの世界遺産(文化6、自然2)を持つ。

「鹿児島県青少年国際協力体験事業」の概要

鹿児島県青少年国際協力体験事業実行委員会

1 趣 旨

鹿児島県の青少年を開発途上国に派遣し、その国づくりに貢献している青年海外協力隊員の活動現場の視察や現地での協力活動を行うことで、国際協力に対する理解を深めるとともにホームステイや学校、施設などでの交流を通して相互理解を深め、国際性豊かな人材を育成する。

また、派遣後は、これらの体験を報告会などを通して学校や地元に戻元し地域レベルでの国際化に寄与するものとする。

2 事業主体

主催：「鹿児島県青少年国際協力体験事業実行委員会」

※構成団体：鹿児島県青年海外協力隊を支援する会
青年海外協力隊鹿児島県OB会
公益財団法人鹿児島県国際交流協会

共催：鹿児島県内の関係市町村

後援：独立行政法人国際協力機構九州センター、鹿児島県、鹿児島県教育委員会

協賛：鹿児島県内の企業

3 派遣先

派遣国はアジア諸国を対象とする（実績は別紙参照）

4 派遣者

参加者：県内各地から募集・選考した10～20名の中学生、高校生、専門学校生

同行者：実行委員会関係者と新聞社、テレビ局など報道関係者

共催市町村職員

5 実施時期

7月下旬～8月上旬の間の1週間程度

派遣の前後に事前研修会、報告会なども実施

6 経費

この事業の実施に要する経費は、実行委員会の構成団体、協賛企業、共催者（参加者に対する助成金による方法を含む）及び参加者が負担する。

「鹿児島県青少年国際協力体験事業」の実績

	派遣国（地域）	派遣期間	人数 （生徒数）	参加者の出身市町村・共催市町村	備考
第1回	マレーシア （コタバル、カマドゥ）	平成3年 3/27（水）～4/3（水） （7泊8日）	17名 （10）	鹿児島市、阿久根市、名瀬市、市来町、伊集院町、 祁答院町、内之浦町、佐多町	公募
第2回	マレーシア （スラバワ）	平成4年 3/27（金）～4/3（金） （7泊8日）	17名 （10）	鹿児島市、鹿屋市、大口市、指宿市、 隼人町	公募
第3回	マレーシア （クナ、テガアイル）	平成5年 7/23（金）～7/30（金） （7泊8日）	17名 （10）	鹿児島市、加世田市、三島村、隼人町、志布志町、 高山町	公募
第4回	インドネシア （パトツ、バシルカ）	平成6年 8/1（月）～8/7（日） （6泊7日）	15名 （9）	鹿児島市、出水市、指宿市、垂水市、菱刈町、 霧島町	公募
第5回	マレーシア （コタバル）	平成7年 7/30（日）～8/6（日） （7泊8日）	16名 （10）	鹿児島市、国分市、額賀町、宮之城町、隼人町、 吾平町、根占町、中種子町	公募
第6回	マレーシア （タピツ、バシットンリ）	平成9年 7/27（日）～8/3（日） （7泊8日）	16名 （11）	鹿児島市、串木野市、東市来町、伊集院町、郡 山町、日吉町、吹上町、金峰町	市町村推薦
第7回	マレーシア （クナ、テガアイル）	平成10年 7/26（日）～8/2（日） （7泊8日）	25名 （20）	鹿児島市、大口市、国分市、菱刈町、 始良町、蒲生町、溝辺町、横川町、 栗野町、吉松町、牧園町、隼人町、福山町	市町村推薦
第8回	タイ （アタ、ルカオ）	平成11年 7/30（金）～8/5（木） （6泊7日）	14名 （9）	鹿児島市、指宿市、加世田市、喜入町、 笠沙町、知覧町	市町村推薦
第9回	タイ （チェンマイ、メカホン）	平成12年 7/24（日）～7/31（月） （7泊8日）	20名 （14）	鹿児島市、鹿屋市、国分市、垂水市、 祁答院町、財部町、末吉町、串良町	市町村推薦
第10回	ベトナム （ホーチン、フホ）	平成13年 7/20（金）～7/26（木） （6泊7日）	19名 （13）	鹿児島市、出水市、加世田市、国分市、垂水市、 祁答院町、溝辺町	市町村推薦
第11回	ベトナム （ホーチン、タビン）	平成14年 8/4（金）～8/10（木） （6泊7日）	17名 （11）	鹿児島市、串木野市、枕崎市、国分市、垂水市、 溝辺町	市町村推薦
第12回	タイ （カンチャナマリ県を予定していた）	平成15年度 SARS及び鳥インフルエンザの影響により中止			市町村推薦
第13回	マレーシア （クアラリムール、マラカ市、トシガマ州）	平成16年 7/19（月）～7/26（月） （7泊8日）	13名 （9）	鹿児島市、枕崎市、国分市、 実行委員会枠	市町村推薦 実行委員会推薦
第14回	ベトナム （ハノイ、ホアビン省、ハイ村）	平成17年 7/24（日）～7/31（日） （7泊8日）	20名 （14）	鹿児島市、枕崎市、串木野市、国分市、知覧町、 実行委員会枠	市町村推薦 実行委員会推薦
第15回	マレーシア （クアラリムール、マラカ市、サバ州）	平成18年 7/22（土）～7/29（土） （7泊8日）	18名 （12）	鹿児島市、枕崎市、霧島市、知覧町 実行委員会枠	市町村推薦 実行委員会推薦
第16回	ベトナム （ハノイ、バクサン省、バクン省）	平成19年 7/22（日）～7/29（日） （7泊8日）	23名 （17）	鹿児島市、枕崎市、霧島市、 いちき串木野市、南さつま市、知覧町、 実行委員会枠	市町村推薦 実行委員会推薦
第17回	ラオス （ビエンチャン県、ソム村）	平成20年 7/20（日）～7/27（日） （7泊8日）	20名 （14）	鹿児島市、鹿屋市、枕崎市、霧島市、 南さつま市、南九州市、実行委員会枠	市町村推薦 実行委員会推薦
第18回	ラオス （ビエンチャン県、ソム村）	平成21年 7/19（日）～7/26（日） （7泊8日）	18名 （14）	鹿児島市、鹿屋市、枕崎市、いちき串木野市、 南さつま市、南九州市、実行委員会枠	市町村推薦 実行委員会推薦
第19回	インドネシア （南スラウェシ州、ガバサ村）	平成22年 8/1（日）～8/8（日） （7泊8日）	19名 （13）	鹿児島市、鹿屋市、霧島市、南九州市、南さ つま市、枕崎市、実行委員会枠	市町村推薦 実行委員会推薦
第20回	マレーシア （クランタン州、クランタン村）	平成23年 7/24（日）～7/31（日） （7泊8日）	22名 （16）	鹿児島市、鹿屋市、枕崎市、霧島市、 いちき串木野市、南さつま市、南九州市、 実行委員会枠	市町村推薦 実行委員会推薦
第21回	ベトナム （ホーチン市、ティンガン省、グイットイ村）	平成24年 7/22（日）～7/29（日） （7泊8日）	22名 （16）	鹿児島市、鹿屋市、霧島市、南九州市 南さつま市、枕崎市、実行委員会枠	市町村推薦 実行委員会推薦
第22回	ベトナム （ダナ市、ホアン市）	平成25年 7/21（日）～7/28（日） （7泊8日）	23名 （17）	鹿児島市、鹿屋市、枕崎市、霧島市 いちき串木野市、南さつま市、南九州市、 実行委員会枠	市町村推薦 実行委員会推薦
第23回	カンボジア （プノンポン、バットバン）	平成26年 7/20（日）～7/27（日） （7泊8日）	23名 （16）	鹿児島市、鹿屋市、枕崎市、霧島市 南さつま市、南九州市、実行委員会枠	市町村推薦 実行委員会推薦
第24回	カンボジア （プノンポン、カンダール）	平成27年 7/19（日）～7/26（日） （7泊8日）	22名 （16）	鹿児島市、鹿屋市、枕崎市、霧島市、 いちき串木野市、南さつま市、南九州市、 実行委員会枠	市町村推薦 実行委員会推薦
第25回	ラオス （ビエンチャン県、ビエンチャン県）	平成28年 7/24（日）～7/31（日） （7泊8日）	20名 （14）	鹿児島市、鹿屋市、霧島市、南さつま市、南 九州市、枕崎市、 実行委員会枠	市町村推薦 実行委員会推薦
第26回	ラオス （ビエンチャン県、ビエンチャン県）	平成29年 7/23（日）～7/30（日） （7泊8日）	22名 （16）	鹿児島市、鹿屋市、霧島市、いちき串木野市、 南九州市、南さつま市、枕崎市、 実行委員会枠	市町村推薦 実行委員会推薦
第27回	スリランカ （西部州、ガンパハ県）	平成30年 7/25（水）～8/1（水） （7泊8日）	21名 （15）	鹿児島市、鹿屋市、枕崎市、霧島市、 南九州市、南さつま市、実行委員会枠	市町村推薦 実行委員会推薦
	計7カ国	計（346）平均13人			



＝編集・発行＝

鹿児島県青少年国際協力体験事業実行委員会

〒892-0816 鹿児島県鹿児島市山下町 14-50

かごしま県民交流センター1階

公益財団法人鹿児島県国際交流協会内

担当：酒井 恵, 外西 朋子

TEL : 099-221-6620 FAX : 099-221-6643

裏表紙デザイン：今別府 幸芽（鹿児島高等学校 2年）